

## 社会的要因による 言語コミュニケーションの変化に 魅せられ続ける探究者

社会言語学 (Sociolinguistics) は、言語・コミュニケーションを人間・文化・社会との関わりで分析しようとする応用言語学 (Applied Linguistics) の一分野である。

社会階層、民族、性別、文脈、国家、地理といったさまざまな視点で多様化した言語に焦点を当て、人が日常、人間関係や行動、出来事を円滑に進めるために、どのような言葉をどのように使っているのか、また、その結果として発展または鍛錬された言語的行動や態度について研究する。

特に社会的要因による言葉の変化について語る時、「面白い」「興味深い」と繰り返し好奇心に満ちたベイツ先生に、研究者としての原点を見る。

### 社会的要因によって変化する 言葉とその影響を追う

その時代の価値観や思想は、言語に色濃く反映する。例えば「肌色」。

「以前私たちは「肌色」という言葉を使っていました。今はめったに使うことはありません。「肌色」とは何色なのか？これは、21世紀前後に政治や世界観が大きく変化したことに基づき、言葉の使い方が変化している例です。慣習、政治、歴史、年齢などさまざまな理由で、言葉がどのように使われているかを調べるのはとても面白いです」と言葉の変

化に強く興味を示すベイツ先生。

ソーシャルメディアは、現在言葉を変化させている社会的要因のひとつである。例えば、「laugh out loud(声を出して笑う)」を意味する頭字語の「LOL」などがTwitterやFacebookのようなSNSでよく使われるようになった。SNSではこうした省略語の他、文法的不おかしい言葉も見られるが、先生はそんな言葉の変化も「進化」と断言する。

「従来の観点で文法的に間違っている、それが今の人びとの言葉の使い方であるならば、それはまさに言葉の進化なのです。そして、それが

一般的に広まれば、標準的なものとなるでしょう。そうした変化こそが、私が非常に面白く思う部分なのです」

この分野で多くの研究がある「方言」に「社会階層」という要因が加わると、言葉は人の行動を変えらるという。

ベイツ先生の母国イギリスは「階級社会」といわれ、制度などの表面的な社会システムとしては徐々になくなりつつあるものの、その意識は現在も根強く残っているという。

「私はクイーンズ・イングリッシュではありませんが、かなりニュートラルな英語を話します。し

かし、私はノーフォークという農村の出身で、私の祖父母や両親は非常に強いノーフォーク訛りがありました。私は訛りのネガティブなイメージを嫌い、都会の大学に進学した際、現在のようなニュートラルなアクセントで話すように努力しました。私の姉も同様だったと思います」

今は、そのニュートラルな英語ゆえに「ノーフォーク出身とは思えない」とか、最近では「あなたは上品だから上流階級の出身ね」と言われたことさえあるという。

「私が身につけたこのアクセントが、私に対する人びとの見る目と態



BATES, Daniel Michael (ベイツ, ダニエル マイケル)

ハル大学 (The University of Hull, England) 音楽学科 (Department of Music) 卒業、ロンドン大学キングス・カレッジ (King's College London, England) 英語教育・応用言語学科 (Department of Arts in English Language Teaching and Applied Linguistics) 修了、英語教育・応用言語学修士 (Master of Arts in English Language Teaching and Applied Linguistics) 取得 (ロンドン大学 キングス・カレッジ)。圓光大学 (韓国)、マハナコーン工科大学 (タイ)、亜細亜大学 英語教育センター客員講師を経て、2021年4月より中央大学総合政策学部特任助教に着任、現在に至る。

## 理由がないことも面白い「言語景観」研究

度を変えたのです。これは話す言葉によって人びとの態度が変わるという好例だと思えます。その結果、自分の行動も変わり、他人との付き合い方も変わってくるのです」

ベイツ先生が、社会言語学の中でも最近特に注目している分野に「言

語景観 (Linguistic Landscape)」がある。

ここ10〜15年の間に社会言語学の一部として広まってきた新しい研究分野で、お店の看板や道路標識など公共の場にあるサインにおける言語を研究する。

「どのような種類の言語がどのように使われているか、またその影響といったものを調べます。言語景観は書き言葉を観察するので、時間の経過とともに言葉がどのように変化しているか、地域によってどのようなスタイルがあるかを明確に見ることができます」

先生がこの言語景観の研究を始めたきっかけは、社会言語学の授業で、学生に自分が住んでいる地域の言語景観について小規模な研究を課したことだった。

「あちらこちらに行って看板を見たり、地元と新宿の違いを観察したりする、基本的な比較研究です。それがとても興味深い内容だったので、自分でもやってみようと思いました」

先生はある時日本人学生と留学生

を対象に、キャンパス内の看板に使われている言葉についてアンケート調査したところ、日本語を学んでいた留学生の多くは「日本語だけの方がわかりやすい」と答え、日本の学生は、母国語の日本語が一番上にあつたため他の言語は気にならず、「複数の言語がある方が便利なのではないか」と考えた。両者が全く異なる意見となったこの結果に、先生は驚いたという。

先生の最近の研究は、日本の5つの主要都市である東京、横浜、札幌、大阪、福岡を対象にした言語景観についての比較研究だそうだが、現在日本では、外国人の旅行者や居住者が増加傾向にあり、それにもない行政やサービス産業において多言語対応が進んでおり、それが最近の日本の言語景観の特徴にもなっている。

「私の研究ではありませんが、興味深い研究のひとつに日本の言語景観における英語翻訳についての考察があります。例えば、ひとつの看板の中に「橋」という日本語の他にその英訳表記として「HASHI」というローマ字



「この研究は、言語学だけでなく、人類学、社会学、歴史、政治にまで及んでおり、私を魅了しています」と研究の楽しさを何度も語るベイツ先生。

## 世界をより広く理解するための「クリティカル・シンキング」

読みが書かれていたり、「bridge」を使っていることもあれば、時には両方書かれていることもあります。だいたいいつもこれらの言葉が混在していて、そこに一貫したポリシーはありませんが、「日本橋」のように外国人によく知られているような場所では、「Nihon Bridge」ではなく「Nihonbashi」と表記されることが多いようです。そこには明確な理由がないことも多く、そこがこの研究の非常に面白いところなのです」

先生は現在SDGsをテーマとして、「PERFORMANCE FOCUS for SDGs」と「READING FOCUS for SDGs」のふたつの授業を担当している。前者は、英語でどのように情報を伝えるかというアウトプットに焦点を当て、プレゼンテーションのスキルを学ぶ。後者は英語で書かれた情報をどのように理解するかというインプットに焦点を当て、テキストを論理的に深く読み込むアクティブラーニングのスキルを学ぶ。どちらも現代の問題に対して幅広い知識を得、最終的に自分の考えや意見を持つことを目的とされている。その際に必要なのが「クリティカル・シンキング」という思考法だ。「クリティカル・シンキングは物事の改善に役立つと思います。文章を読む時もそこにある著者やジャーナリストの考えについて「これは正しいのか」と疑問を持って考察する

ことです。また、自分と異なる考えのものも含めて本や記事、ブログ、SNSなどさまざまな読み物をアクティブラーニングすることは多角的な視点を養います。クリティカル・シンキングを会得することによって、世界的な課題についても自分の意見を強く持つてディベートやディスカッションができるようになります。世界をより広く理解することができるのです」

コロナ禍の現在は主にズーム(ZOOM)を用いて、ディベートやディスカッションに多くの時間を費やす「反転授業」を行っている。

「反転授業は、従来は授業で教えていたことを授業の前に宿題としてやってきてもらい、授業ではそれをもとにディスカッションなどを行うため、学習者の自主性が非常に重要です。もし学生が宿題をしてこなければ、授業に参加できません。学生は自分の学習に責任を持つことにより、その能力を大きく伸ばすのです」日本人は、議論すると賛同や同意ばかりになりがちであるが、先生は

意見を異にすることはまったく問題ないと言う。

「理由を述べて自分の考えを裏付けることができれば、異論を交わすのはむしろ良いことなのです。私は学生に異論も論理的に展開できる力を伸ばしてほしいと思っています」

## 多様性を受け入れ、世界とコミュニケーションする

先生の研究は、社会言語学に加えて言語評価に関連したものも多い。



全員によるセッションの後、小グループに分かれてディベートやディスカッションを行い、発言力を養う。



ギターを演奏する先生。「タイのストリートフードや匂い、騒がしい車など全てが衝撃的でした」

これまでにも、日本やアジアの主要な学会や言語教育専門誌にいくつかの論文を発表してきた。その中でも留学に際する新しい適性評価法を発表したことは、大きな成果のひとつだという。

これまでのTOEFLやTOEICのスコアを基準とする適性評価に疑問を持ち、その動機やモチベーション、考え方、留学に関する知識、文化的認識を評価できるような新しいテストをデザインした。

「従来のような評価も多少は必要だと思えますが、彼らは英語を上達させるために留学するのですから、重要なのは現在の英語力より、留学

後の可能性を測ることだと思いま

す。勉強だけではなく、海外生活の難しさも含めて学生が留学を真剣に考えているかどうかが肝心です。現在TOEICのスコアが300点でも、留学に対する真剣な姿勢があれば、留学後の語学力も向上するでしょう。そうした学生に、人生を変える可能性のある留学という有意義な機会を与えることが重要なのです」

文法や発音の「正しさ」は、もはやそれほど重要ではない。重要なのは、英語を学ぶことの先にある「コミュニケーション」である、と先生は説く。

コミュニケーションを大切にする

先生のオフィスは常に開放されており、学生が気軽に訪れられるようにしているという。オフィスでは勉強の質問や相談だけでなく、音楽や映画や料理などの趣味や共通の話題で盛り

上がったりするそうだ。

そんなベイツ先生、実は大学時代の専攻は音楽で、ギターやピアノを弾いたり、作曲もする。以前タイにいた時は、現地のレストランやバーで週の半分ほど生演奏していたくらいの腕前だ。

海外に興味があったベイツ先生は、これまでに7カ国で教鞭を執ってきた。オーストラリア各地、ポーランド、アゼルバイジャンで英語のみならず、文化やクリティカル・シンキングのようなスキルも教えてきた。

「若い頃は、旅をしながら何かボランティアのような仕事をしたいと思っていました。そこで、戦争孤児や親に捨てられた子どもたちにいるネパールの孤児院で活動を始め、その孤児院が連携していた地元で学校で仕事も得ました。それは素晴らしい経験でした」

このネパール以降、韓国で数年、タイのバンコクで6年を過ごし、2015年に来日した。

「アジアで多くの時間を過ごしましたが、どこの国もとても居心地が

良いです」とさまざまな国の文化を楽しめるのも、先生のおふれる好奇心ゆえだろう。

多様な文化に接し、ボランティアなどを通して現代の問題に真摯に向き合ってきた先生だからこそ、多様性の受容と世界の課題を改善するクリティカル・シンキングが、先生の教育の要におかれているのだと納得した。

### 高校生の皆さんへ

「新しいことを学ぶ」ということは、新しい知識を増やすだけでなく、新しい方法で考える機会でもあります。

「多角的視点を育成する」という方針をもつこの学部では、幅広いテーマについてさまざまな方法を用いて、世界をより広く理解した上で自分の考えや意見を持ち、国際社会でも通用する実践能力を身につけることができます。

ひとりひとりが自主性を持って、ぜひ、そのチャンスをつかんでください。